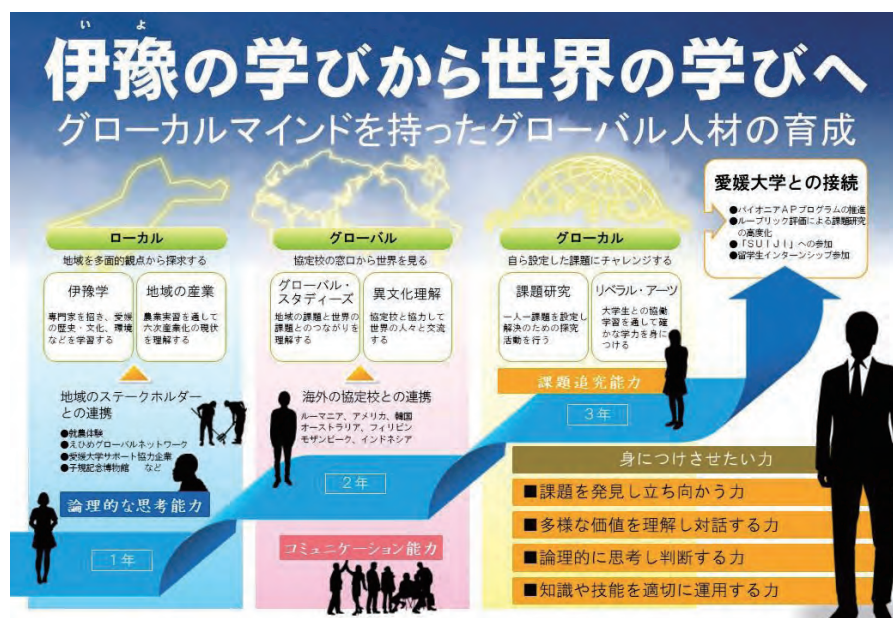


愛媛大学附属高等学校

伊豫の学びから世界の学びへ ～グローバルマインドを持ったグローバル人材の育成～

【構想の概要】

- グローバル人材の育成に資する課題研究を中心としたカリキュラムの開発・実践
- 大学や企業、海外の協定校等と連携したカリキュラムの開発・実践
- 地域の課題と世界の課題との繋がりを理解し、生徒自らが設定した課題に失敗を恐れずチャレンジする精神の育成を図るカリキュラムの開発・実践
- 本取組を広く公開し、グローバルな視点で社会課題を解決することにより地域社会の発展を支える人材育成の拠点校としての役割遂行
- 全教職員が主体的に取り組む組織作り



■ 教育課程表 (全日制 総合学科 1学年 120名)

学年次	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35
1年生	国語総合	英語A	数学I	数学A	化学基礎	生物基礎	体育	保健	芸術I	コンピュータサイエンス基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎
2年生	国語総合	英語A	数学I	数学A	化学基礎	生物基礎	体育	保健	芸術I	コンピュータサイエンス基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎
3年生	国語総合	英語A	数学I	数学A	化学基礎	生物基礎	体育	保健	芸術I	コンピュータサイエンス基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎	英語基礎

※SGH対象生徒：全校生徒（360名）

学校設定科目

本校の目指すグローバル人材は、地域の課題と世界の課題を統合的に捉えるグローバルな視点を持ち、社会課題に対して失敗を恐れずに挑戦し続ける人材である。そこで、上記の教育課程表に示したように、1年次の地域のプロジェクト学習から、2年次のグローバルな協働的課題発見解決学習を通して、3年次で個性豊かでグローバルな探究的課題研究、大学生と共に学ぶ専門性の高い二重単位付与授業の受講へとつながる一貫性のあるステップアップ型のプログラムを開発した。

(1) 1年次設定科目

「伊豫学」では、愛媛大学の全学的組織と連携の下、愛媛大学長をはじめとした大学教員延べ54名による、愛媛の自然環境、文化、産業、歴史、科学技術と情報、医療と福祉、国際社会とのつながり等をテーマとした課題発見解決型の授業を実施できた。さらに、地元企業や外国政府機関と連携した特別授業を実施した。

本授業では、課題をグループで討論し、解決に導く課題解決学習を取り入れ（図1）、主体的に課題を発見し、解決する力を身に付け、論理的な思考力やコミュニケーション力を養った（表1）。教科横断的に教員を配置した指導体制を構築するとともに、愛媛大学教員や、地元企業の有識者による指導を含めて学習をさらに深化させた。



図1：課題解決に向けたディスカッションの様子

表1：具体的能力が身に付いたと回答した生徒の割合（H28年度）

・課題を発見し立ち向かう力	74%
・多様な価値を理解し対話する力	93%
・論理的に思考し判断する力	81%
・知識や技能を適切に運用する力	86%

「地域の産業」においては、PDCAサイクルを利用したプロジェクト学習方式を取り入れ、本校農業科教員（8名）が担当し、農業の六次産業化や国際化の現状を理解し、主体的に身近な地域の課題を発見・探究する授業を行った。校内でプロジェクト学習発表大会を開催し、学習成果（地元企業と連携した商品開発プロジェクト等）を発表することで、全校生徒に研究内容を共有した。SGH報告会においても地域産業に関する研究成果を発表する機会を新設した。

(2) 2年次設定科目

「グローバル・スタディーズ」では、愛媛大学の教員による、課題発見解決型の授業を60時間（全体の74%）実施し、地球環境と倫理、農林業、工業、生態系等をテーマに、1年次に学習した地域の課題と世界で起こっているグローバルな社会課題との繋がりについて学習した。また、愛媛大学の留学生（8名）との共同による新たな教育プログラムを企画・実施（図2）した（トークライブ、ディスカッション、プレゼンテーション、グループワークによる授業実践）。



図2：外国人留学生との共同授業

「異文化理解」では、生徒がグループとなり、海外の生徒とも交流を行いながら、地域の課題と世界の課題との繋がりを学ぶ授業を行った。海外研修では、協定校等（5か国：5高校、2大学）を本校2年生120名中の35名（アメリカ：6名、フィリピン：6名、ルーマニア：6名、韓国：12名、オーストラリア：5名）が現地渡航し（平成28年度実績）、協働的な課題解決学習を行った。他の年度においても同等の人数が海外研修に参加している。

渡航前の学習は、2年生全員が参加し、英語資料を基に課題発見・解決型の意見交換や研究交流を行うための学習を行った。また、事前指導より、本校

教員と対象国や内容に詳しい愛媛大学教員（5 か国それぞれに本校教員 2 名と大学教員 2 名による指導体制：計 20 名）とがペアとなって指導する体制を構築し、質の高い実践的な学習になるよう工夫した。ここでも連携大学の留学生によるサポートを受け授業を実施した。海外研修引率においては、地歴・公民科と英語科の高校教員、法文学部と教育学部の大学教員が 4 名で一組になって指導、研修引率をする等、校内外で教科・学問分野を超えた連携を行った。

(3) 3 年次設定科目

「課題研究」では、愛媛大学の全学部（7 学部）及び大学附属施設・機構等の組織との連携により、本校 3 年全生徒（120 名）に対して、大学教員約 50 名が指導者、本校全教員がアドバイザーとして研究をサポートし、地域あるいは世界の課題を設定し、1 年間をかけて探究型調査・研究を行った。本校の課題研究は、1 年次から課題発見・解決能力などを涵養する授業を展開し、生徒が共通テーマを追究するのではなく、各自がその進路を視野に入れつつ一人一課題で自分の興味関心を、広い文脈から深く追究することをその特長としている。また、愛媛大学と連携を図り、次年度の本実施に向けた組織（課題研究コーディネータ会議）を構築することができた。その結果、9 月に課題研究成果発表会（一般公開）（図 3）を実施し、2 月には課題研究代表者発表会（一般公開）を実施することができた。

大学教員のアンケート結果より、高校教員との連携について 94%の教員が良好と回答している。（平成 28 年度）



図 3：課題研究成果発表会の様子

「リベラル・アーツ」では、愛媛大学との連携により、高校のカリキュラムの一部として、3 年生全

員（120 名）が愛媛大学共通教育科目 10 講座から 1 講座を選択し、大学生と一緒に受講した。大学生と同じ基準で評価を受け、十分な成績をあげた場合には愛媛大学入学後に正規の単位として認定する高大接続を実質化する制度（デュアル単位付与）を確立できた（単位認定者：平成 28 年度：106 名、平成 29 年度 99 名）。

成果と課題の分析検証

(1) 生徒の変容調査

S G H事業の成果を分析するために 1 年生を対象に入学直後（5 月）と 3 学期中（1 月）に質問紙調査を行った結果、以下に示すように留学や海外研修及び国際的に活躍したい生徒の割合が増加した。（平成 27 年度）

①留学または海外研修に参加したいか

指定前の肯定的回答率：63% → 指定後：82%
(19%増)

②将来留学や仕事で国際的に活躍したいか

指定前の肯定的回答率：36% → 指定後：53%
(17%増)

(2) 地域（愛媛）に関する記述式調査

地域（愛媛）に関する知識量を計るために記述式の質問紙調査を 1 年生全生徒に行った。S G H指定前後ですべての項目において、キーワード数が著しい伸びを示した。（平成 27 年度）

①地域（愛媛）の課題、またその解決方法

指定前：1.1 個 → 指定後：5.7 個（約 5.2 倍）

②世界の課題、その解決方法

指定前：1.6 個 → 指定後：5.3 個（約 3.3 倍）

(3) 海外研修前後の生徒の意識変容調査

海外研修渡航前後に質問紙調査を渡航者全員を対象にして行った。多くの項目で国際交流に関わる自己有能感が大きく上昇した。（平成 28 年度）

①海外の高校生に日本の文化や習慣を説明できる
研修前の肯定的回答率：89% → 研修後：100%
(11%増)

②海外の文化や習慣を級友に説明できる
研修前の肯定的回答率：72% → 研修後：100%
(28%増)

③世界の様々な国で自分を役立てることができる
研修前の肯定的回答率：44% → 研修後：66%
(22%増)

(4) 教員の意識変容調査

教員の意識変容調査を、全教員対象に実施した。本校SGHの取組によって、ほとんどの教員のグローバル人材育成の重要性に関する意識が変容しており（表3、4）、本校教員はSGH事業の重要性を認識・共有できており、学校の環境や教員本人の意識も、グローバル人材の育成へ向けて変化していた。

表3：グローバル人材育成の重要性に関する意識の変容

意識の変容があった	86%
あまり意識変容がなかった	14%
意識変容がなかった	0%

表4：本取組がグローバル人材育成につながっているか

その様に考えている	86%
あまりそう思わない	14%
思わない	0%

成果の普及

認定（平成27年）以降、平成29年度までに本事業の成果の発信に積極的に取り組んでいる。

(1) 研究成果に関する発表会

①課題研究成果発表会（9月） ②SGH報告会（2月） ③課題研究代表者発表会（2月）

参加者総数（①＋②＋③）：約1,180名

(2) 本校HP、管理機関HP、SGH専用HP作成

①本校のHP：本事業の取り組みや成果を定期的に情報発信した（更新数：226回）。平成27年度に日本語版及び英語版のHPを開設し積極的に情報発信した。※第1回全国農業高校・農業大学校ホームページコンテスト愛媛県最優秀賞

②管理機関のHP：愛媛大学の広報部局と連携し、愛媛大学のHPにおいても本事業の取り組みや成果を積極的に情報発信した。

(3) 生徒による研究発表等（44件、受賞等28件）

(4) 教員による研究発表・論文掲載等（19件）

(5) 報道機関による報道（61回）

先進的・特徴的な取り組み

(1) 国内の大学との定常的な連携

全国的にも数少ない大学の附属高等学校という特色を活かし、組織的で継続性のある専門性の高い連携を行った。

①高大連携事業としての二重単位の付与

3年次の設定科目「リベラル・アーツ」において120人全員が、週1コマ愛媛大学のキャンパスに通って大学生とともに共通教育科目を受講した。大学生と同じ評価基準で十分な学修成果をあげた場合には入学後に大学の正規単位として認定する二重単位付与を実施した。

平成27年度10月から愛媛大学公開授業「英語総合Ⅰ」を開講し、放課後の時間を利用して大学レベルの授業を受講した。授業は全15回の日程で、愛媛大学の成績評価基準による評価を行い、二重単位が付与された。

②大学と連携・開発したルーブリック評価による「課題研究」の高度化・標準化と入試への活用

「課題研究」で培われた「確かな学力」の測定のため、愛媛大学と協力してルーブリックを新規に開発し、活用した。このルーブリックは、評価の妥当性・客観性を向上させるだけでなく、「課題研究」自体の高度化を促すものであった。

③高大で一貫して汎用的能力を育むICT教材の共同開発

高校から大学への教育の一貫性を高め、汎用的能力を育成するために、「情報リテラシー入門」や「日本語リテラシー入門」等のICT教材を共同開発した。

(2) 国外の大学・高校との交流協定締結・連携

本校独自に2校（平成26年10月：ルーマニア：イオン・クレアンガ高校、平成27年4月：オーストラリア：セント・アンドリュース高校）と交流協定を締結した。また、平成30年度には、新たに姉妹校協定を締結する予定である。さらに、現在国外の大学・高校との定常的な連携を図るための、新たなホームページを作成している（平成30年8月公開予定）。